

情報科学研究科

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

情報科学研究科では、修士課程・博士後期課程においてともに、育成しようとする人物像が明確に描かれ、それに基づくディプロマ・カリキュラム・アドミッションの3ポリシーが整合性をともなって定められている。これらは教育プログラムを管理・運営する教員にとっても受講する学生にとってもわかりやすい構造になっており、点検・評価に要する作業負担も軽減される。コースワークとリサーチワークが明確に区別して設定され、研究タイプと開発タイプの人材が輩出される教育課程が構築され、情報科学分野に求められる社会のニーズを満たす大学院運営がなされている。ダブルディグリープログラム、IIST科目の開講、国際学会への参加奨励など、グローバル化への取り組みがきわめて積極的で評価に値し、一定の教育効果を確認することができる。学生への支援は情報科学部とともに独創的で効果的な取り組みがなされ、学内外を通して高く評価される内容となっている。たゆまなく教育改善が進む仕組みが構築され、意思決定プロセスのプラットフォームとしての研究科ガバナンスが安定している。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2018年度に、学生主体の論文発表データベースを構築し、学会発表情報を学生間で共有することにより、他の学生の研究成果発表活動が見える化された。学生から、研究活動の目標として励みになったという話を聞いている。国際会議も含め、学会での表彰数も増加傾向にある。また、IISTも軌道にのり、2019年度には多数の学生受け入れが予定されている。一方で、2019年度のダブルディグリープログラムの学生が1名だけになり、危機感を持つ。2019年度以降、将来のグローバル化の方向性を定めつつ、日本人学生にとっても、魅力的な研究科づくりを継続して進めていく予定である。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。

S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

コースワークは2年間で18単位、リサーチワークは同じく2年間でオープンセミナー2単位、特別研究1A、1B、2A、2Bで計6単位、特別演習1A、1B、2A、2Bで計4単位の構成となっている。本研究科では、コースワークは主に修士論文作成に向けた研究の遂行に必要な専門知識の獲得と位置付けている。リサーチワークは実践的な研究能力の向上に資するものと位置付けている。特に、2019年度からリサーチワークのセメスター化を実現し、9月から1年間の留学や半期留学に対応しやすい履修体系を整えた。学生は当該教育研究領域の開講科目と周辺領域での開講科目とから18単位分を修得する。各教育研究領域で開講される科目群は、英語で講義が行われるものと日本語で講義が行われるものとが用意されており、学生は自身の能力に応じて選択するが、当該分野周辺の専門技術習得のために十分な技術基盤が得られるように配分している。リサーチワークにおいては、時間管理および進捗管理を進めるため、2月に修士論文中間発表会をポスター発表の形で開催している。修士論文発表会は2トラックで多くの教員が質疑に参加できるように配慮するなど、評価の公平性を保ちつつ、評価の厳格化を目指すことで修士論文の質の向上を図っている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

国際化の促進、履修科目の領域拡大を目的に、2018年度から理工学研究科とも協力して、IIST科目の英語開講科目の履修を可能にした。また、2019年度からリサーチワークおよび修士論文をセメスター単位の履修科目に変更することで、留学などに柔軟に対応できる科目開設とした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学院学則
- ・<https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/>
- ・<https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/1.20190408courseoutlines.pdf>
- ・https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2.2019courseoutlines_CIS.pdf

②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。

はい いいえ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。 ・大学院学則 ・ https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/ ・ https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/1.20190408courseoutlines.pdf ・ https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2.2019courseoutlines_CIS.pdf	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※コースワーク、リサーチワークを組み合わせさせた教育課程の概要を記入。 2016年度から博士後期課程にコースワークを導入した。各教育研究領域にリサーチワークとして特別研究と特別演習を置き、さらにコースワークとしてプロジェクト科目を設置して両者を組み合わせさせた教育課程を行うものである。コースワークは、問題解決能力を育成するものと位置付けており、リサーチワークは文字通り自身の研究能力を向上させるだけでなく、研究指導能力までも養成すると位置付けている。	
【2018年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2019年度からリサーチワークをセメスター化し、博士後期課程の途中で留学する場合などに柔軟に対応できるよう、履修体系を整備した。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・大学院学則 ・ https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/ ・ https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/1.20190408courseoutlines.pdf ・ https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2.2019courseoutlines_CIS.pdf	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 【修士】 情報科学にはコンピューティングに関する要素研究と、コンピュータ上において情報処理問題を扱うコンピュータシステム、さらに社会的ニーズに基づく対象をトータルシステムとして解決するための情報システムの教育研究がある。本研究科では、学部での教育コース（コンピュータ基礎、情報システム、メディア科学）の上に3つの研究領域と国際化対応を目指した4つ目の研究領域とを配置して専門技術習得のために十分な知識および技術基盤が得られるように教育課程を編成している。それぞれの領域のテーマと開講科目とを以下に示す。 第1研究領域（コンピュータ基礎）：情報システムを構築するための並列コンピュータの構造論、ソフトウェア環境、暗号理論、ソフトウェア検証などの研究を行う 第2研究領域（情報システム）：人工知能、進化計算、データマイニング、Webシステム構築などの研究を行う 第3研究領域（メディア科学）：音声・言語処理、パターン認識、形状モデリングなどの研究を行う 第4研究領域（国際化対応情報科学）：国際化対応のための技術英語・論文・発表技術、先端ビジネスアプリケーションシステム開発などの研究を行う。 また、最新の研究活動について知る機会として、選択科目の情報科学特別講義と、各教員がオムニバス形式で実施する必修科目の情報科学オープンセミナーを開講している。	
【博士】 博士後期課程の教育は、それぞれの専門分野における研究活動を推進するリサーチワークと、幅広い知識を養うためのコースワークに分かれている。リサーチワークでは、専任教員の指導のもと、難易度の高い国際会議への投稿および発表を推進している。コースワークでは、第1研究領域（コンピュータ基礎）、第2研究領域（情報システム）、第3研究領域（メディア科学）から、バランスよく領域を選択させ、広い知識の習得を心掛けている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・ https://cis.hosei.ac.jp/gs/area/ ・ https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/1.20190408courseoutlines.pdf ・ https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2.2019courseoutlines_CIS.pdf	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。 【修士】	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

中国ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム（DDP）を進めているほか、英語で行う授業と日本語で行う授業とを用意しており、学生の能力に応じて選択できる。これら英語授業には例年日本人学生の履修実績があり、一般学生のグローバル化推進にも役立っている。また、外国人留学生を積極的に受け入れるよう、外国人特別入学制度を用意している。大学院学生に対する教育の一環として、英語でのプレゼンテーション能力を養いグローバルな視点を持たせるため、海外学会での研究発表を強く奨励している。海外学会の発表が決まった学生は、情報科学オープンセミナーにて発表練習する場を設けている。また、留学生にも正しい日本語と日本文化についての知識を与えるべきであるとの判断から、日本語理解1、2の科目（修了単位には数えない）を開設している。

理工学研究科と共同での英語による学位授与を行う IIST を 2016 年 9 月に開設し、2019 年度には複数名の学生が修士課程に入学予定である。

修士論文の審査及び評価においては、国際会議での発表を加点しており、教員の指導の下、積極的な論文発表が行われている。今後も、国際会議での論文発表への誘導を図りグローバルに活躍できる人材育成を助成し、強化する。

【博士】

理工学研究科と共同での英語による学位授与を行う IIST を通して、ダブルディグリーの卒業生が博士後期課程に 2 名進学している。2019 年度には、さらに数名の外国人が博士後期課程に進学を予定であり、学生のグローバル化が進んでいる。

国際会議での表彰実績もあがってきている。

博士論文の審査及び評価においては、論文あるいは国際会議発表を条件にしており、教員の指導の下、積極的な論文発表が推奨されている。今後も、国際会議での論文発表への誘導を図りグローバルに活躍できる人材育成を助成し、強化する。

【2018 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

2018 年度から、学生の論文発表データベースを作成し、相互閲覧可能にした。これにより、他の学生の国際会議での発表状況が共有され、学生の刺激になっている。2019 年度に初めて、IIST を通した修士学生を受け入れる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 論文発表データベース（CIS moodle 上に構築）

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

※履修指導の体制および方法を記入。

【修士】

- 修士 1 年に、各教員のオムニバスによる情報科学オープンセミナーを必修科目として配置することで、最新の技術動向を幅広く認知する機会を与え、多様な研究領域への興味の誘発と、以後の履修の誘導を行っている。
- 第 4 研究領域に配置された科目（英語で講義を実施）を含めてより充実したカリキュラムを運用し、専任教員だけでなく企業からも講師を招いていることから、学生のより広範囲に渡る研究領域の俯瞰を可能としている。
- 学生は、自身の研究テーマにおいて問題解決に必要な専門技術習得のため、自主的にもしくは指導教員の指導の下に履修科目を選定している。
- 指導教員は定期的に研究進捗報告を受けて、適切な助言や学習指導を行っている。

【博士】

- 学生は、指導教員のもと、適切なコースワークを選定している。
- 学生は、自身の研究テーマにおいて問題解決に必要な専門技術習得のため、自主的にもしくは指導教員の指導の下に技術の調査研究を進めている。
- 指導教員は定期的に研究進捗報告を受けて、適切な助言や学習指導を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- <https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/>

②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。

はい いいえ

※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HP や要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。

【修士】

- ガイダンス時に研究指導計画について書面を用いて説明を行っている。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>・課程紹介の Web ページ上で、学習および研究活動の時間的流れを公開し、研究指導に活用している。</p>	
<p>【博士】</p> <p>・ガイダンス時に研究指導計画について書面を用いて説明を行っている。</p> <p>・課程紹介の Web ページ上で、学習および研究活動の時間的流れを公開し、研究指導に活用している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。</p> <p>・ https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/degree/</p>	
③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>修士課程の学生は修士課程 2 年間で少なくとも 1 回は学外研究発表を行うことを前提に研究指導が行われていて、修士論文発表会で確認している。ダブルディグリープログラムの学生についても同様の方法で指導を進めている。また、修士学生の場合は入学の 1 年後、ダブルディグリープログラムの学生は半年後、中間発表会で研究進捗をポスター発表し、全教員から研究の方向性についてのコメントを得る機会を与えている。</p> <p>【博士】</p> <p>博士前期課程の学生は、毎年、中間発表会で研究進捗をポスター発表し、全教員から研究の方向性についてのコメントを得る機会を与えている。また、研究科長が指導教員に対して、学位取得に関する具体的な計画について、その進捗を毎年確認している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・ 第 279 回情報科学研究科教授会議事録</p>	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>・シラバスで事前告知した基準に基づき、成績評価を行っている。</p> <p>・成績の確認においては、入力ミス等に対して、申告に基づき教授会での成績訂正手続きが公正に実施されている。</p> <p>・ダブルディグリープログラムにおける単位互換認定については、先方の大学院シラバスと当方のシラバスとを対比させて厳密に単位認定を行っている。</p> <p>・修士論文については、副指導制度を導入し、合議で成績評価を行っている。</p> <p>【博士】</p> <p>・シラバスで事前告知した基準に基づき、成績評価を行っている。</p> <p>・学位論文については、論文審査委員会を設置し、予備審査と本審査により厳格な学位認定を行っている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・ 特になし</p>	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>・ガイダンスにおいて、書面にて学位論文審査基準を配布し、説明を行っている。</p> <p>・毎年発行する小金井大学院要項に学位論文審査基準を明記し、年度初めのガイダンスで学生に周知している。</p> <p>・Web ページ上で、「学位修了要件」を公開している。</p> <p>【博士】</p> <p>・ガイダンスにおいて、書面にて学位論文審査基準を配布し、説明を行っている。</p> <p>・毎年発行する小金井大学院要項に学位論文審査基準を明記し、年度初めのガイダンスで学生に周知している。</p> <p>・Web ページ上で、「学位修了要件」を公開している。</p> <p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。</p> <p>・ 情報科学研究科修士課程学位審査内規</p> <p>・ 情報科学研究科博士後期課程学位審査内規</p> <p>・ 博士学位申請資格対象となる学術誌及び学術会議基準</p>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・小金井大学院要項 ・学位修了要件 https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/ 	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※箇条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学院在籍者数の確認は、年度初めに教授会に報告されている。 ・学位授与率に関わる情報（退学者、休学者）については、届け出の後教授会の議題となっており、教授会で把握できる。 ・中間発表会での討論では直接的に進捗を把握しており、これらの情報を総合することでその年度の学位授与見込み数（同時に在籍年数）を把握している。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 290 回（2019 年度第 1 回）情報科学研究科教授会議事録 	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>修士課程の大学院生には、1 年生の秋学期末に中間発表会を義務付けている。ポスター発表形式で開催し、研究活動内容を報告させるとともに、研究の内容や進捗度を評価し、優秀者を表彰している。優秀者を決める投票には、教員だけでなく参加院生も加わるため、大学院生同士も互いに評価し合うことになり、モチベーションを高める効果がある。また、論文発表データベースを作成し、他の学生の学会発表状況を共有することにより、各学生のモチベーションを高める試みを 2018 年度に開始した。</p> <p>【博士】</p> <p>博士後期課程においても、2014 年度から学位申請を行っていない学生については、修士課程学生の場合と同様に中間発表を義務付けている。</p> <p>【2018 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2018 年度から、論文発表データベースを構築し、学会発表や学会表彰、論文投稿などの状況を学生相互の間で共有できる仕組みを導入した。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 279 回情報科学研究科教授会議事録 	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。</p> <p>【修士】</p> <p>修士課程では、修士論文審査にあたり、「法政大学学位規則」を順守し、主査および副査が修士論文発表会の場で厳密に審査し、その後の教授会の場で最終的な修了認定を行っている。審査基準を明確にするために、「情報科学研究科修士課程学位審査内規」を策定し運用している。副査は、指導教員である主査が指名した研究領域に近い教員と、研究科長が指名した教員の 2 名で構成し、適切かつ客観的に学位授与の質保証を行っている。</p> <p>【博士】</p> <p>学位審査内規のとおり</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報科学研究科修士課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程における質保証のためのガイドライン 	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文指導教員が把握し、大学院の担当を兼ねる学部の就職担当がそれらを取りまとめて、Web 上のスプレッドシートで共有している。 ・スムーズな就職活動を目的として、大学院生へのインターンシップ参加を強く勧めている。さらに徹底するために、インターンシップの単位化を 2016 年度から導入した。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報科学部教授会議事録（学部と大学院の就職状況を、まとめて報告） 	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】 情報科学領域では、研究成果を国内・海外の学会への投稿論文数と会議発表論文数、表彰数が重要な指標となり、これらの数値で学習の達成度を評価している。この指標に基づき、各種奨学金等の優秀学生の選抜を実施している。これらの研究成果については論文発表データベースを構築し、学生間、および、教員間で共有している。また、学会表彰を受けた学生については、修了証書授与式にて、研究科表彰を実施し、学生の学会参加意欲を高めている。</p> <p>【博士】 国内・海外の学会への投稿論文数と会議発表論文数、表彰数が重要な指標となり、これらの数値で学習の達成度を評価している。この指標に基づき、各種奨学金等の優秀学生の選抜を実施している。これらの研究成果については論文発表データベースを構築し、学生間、および、教員間で共有している。</p> <p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2018年度から論文発表データベースを構築し、論文投稿や学会発表、表彰などの情報共有を開始した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本学生支援機構奨学金返還免除の推薦候補者選考規定</p>	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p> <p>【修士】 ・論文発表データベースを構築し、論文投稿、学会発表、学会表彰について学生自らが登録し、情報共有するシステムを導入している。 ・修士課程においては、修士論文審査にあたり、「法政大学学位規則」を順守し、主査および副査が修士論文発表会場で厳密に審査し、その後の教授会場で最終的な修了認定を行っている。審査基準を明確にするために、「情報科学研究科修士課程学位審査内規」を策定し運用している。</p> <p>【博士】 ・論文発表データベースを構築し、論文投稿、学会発表、学会表彰について学生自らが登録し、情報共有するシステムを導入している。 ・博士後期課程については、審査委員会（研究科教授会）のもと、主査・副査3名以上で構成される審査小委員会が試験によって博士論文に関する学識を確認し、審査委員会にその結果を報告し、審査委員会で審議をしたのち、博士学位授与の可否を決定している。なお、主査は本学専任教員に限るが、2名以上の副査を合わせて、審査小委員会の委員総数の3分の1以内の範囲で学外者も副査に加えることができる。こうした審査基準は「情報科学研究科博士後期課程学位審査内規」および「博士学位申請資格対象となる学術誌及び学術会議基準」にまとめられており、修士課程同様に学生に周知している。</p> <p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2018年度から論文発表データベースを稼働し、情報収集と情報共有を行っている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・情報科学研究科修士課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程における質保証のためのガイドライン</p>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】 ・研究科として、修士1年生での修士論文中間発表会と、修士2年生での修士論文発表会を学生の教育成果の検証の機会</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

と位置付けている。発表会の質を判断材料にして、翌年度以降の教育内容の改善を図っている。	
<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表会はポスター形式の発表であるため、時間をかけて評価でき、学生同士の評価も行われるので、学生に対するフィードバック効果も大きい。 	
【博士】	
<ul style="list-style-type: none"> ・研究科として、毎年1回の中間発表会を、学生の教育成果の検証の機会と位置付けている。発表会の質を判断材料にして、翌年度以降の教育内容の改善を図っている。 ・中間発表会はポスター形式の発表であるため、時間をかけて評価でき、学生同士の評価も行われるので、学生に対するフィードバック効果も大きい。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・学生による授業改善アンケートを教育内容・方法の改善のための有力なツールと位置づけ、授業内にアンケートを実施することで、高い回収率を実現し、授業改善に活用している。 ・講義内容に関しては、技術の進展が早い分野であるので日々見直しを行っており、適宜教授会や懇談会などの場で方向性を議論し、新規教員採用時、および次期セメスター兼任講師への講義依頼時にその検討結果を反映させている。 ・専任教員の間においては、情報科学オープンセミナーを教員相互の教育・研究の情報交換の場と位置づけ、相互の教育・研究の活性化や相互の連携を図る場として活用している。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・情報科学オープンセミナー計画:https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/ 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・修士論文の中間発表会は、1年経過時の学習状況を把握する場として、貴重な機会である。研究のマイルストーンになるだけでなく、他研究室の教員の評価を聞くことで、全体の学位授与の質保証につながることができている。博士後期課程の大学院生には、毎年、中間発表を課しており、学位授与に至る経過管理として重要な役割を担っている。 ・国際会議での発表を奨励し、学位授与時の学習成果の評価に活用している。 	1.4、1.5

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【FD活動を行なうための体制】 ※箇条書きで記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・「情報科学オープンセミナー」は、教員の研究テーマについて交流する場として、全教員のプレゼンテーションを2年間で1周回る形式で行っている。原則、全教員の参加が求められる。 ・隔週開催の主任会議でその時々問題点を抽出し、改善に向けた取り組み（対策）を講じている。より大きな問題については、研究科に設置された質保証委員会に付託して突っ込んだ議論をし、教授会でさらに議論・決議し、対策を実行している。ガイドラインや内規としてまとめ直して運用することもある。 	
【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・情報科学オープンセミナー（春学期の隔週金曜3限、教員の研究活動の発表、原則的に教員全員参加） ・主任会議：隔週水曜日、その時々問題点と改善策の検討、主任会議メンバー 	
【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2018年度から、教授会資料に内部質保証の項目を設け、それぞれの活動について全教員に共通認識を持たせることと、活動記録として残すことに活用している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学オープンセミナー予定 <https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/>

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。

S **A** B

※取り組みの概要を記入。

- ・資格を持つ教員が早い時期に在外研究を行うことを奨励
- ・在外研究・研修の成果をオープンセミナーを通して教員間で共有
- ・教員の研究を加速するために、共同研究者としての大学院生入学者を増やす対策
 - 1) 学外研究発表の奨励
 - 2) 学会参加旅費、登録費の補助

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2018年度には、在外研究員2名が海外で研究活動を行い、研究活動を活性化させる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・2018年度には、在外研究員2名が海外で研究活動を行った。教員の海外での研究活動を活性化させることで、研究の質向上と、グローバル化への対応力を強化している。	2

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	内部質保証	
1	中期目標	質保証サイクルを実質化し、かつ、記録に残すことで、教授会構成員全員の質保証の意識を高める活動を行う。	
	年度目標	教授会の定例報告事項に「内部質保証」を加え、活動を記録に残す。	
	達成指標	教授会議事録への記録	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	5月25日の第269回情報科学研究科教授会の議事録から内部質保証の欄を作成し、適宜、質保証の観点からの重要課題について記載を継続している。
		改善策	今後も、質保証の活動の記録を継続する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1) 質保証の意識高揚、および議事録記載による実質的進捗をもたらした。		
改善のための提言	活動記録の継続による質保証の具体的な成果を明記できることが望ましい。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
2	中期目標	情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的な教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	IIST と協力した英語開講科目の共有化を行う。翌年度に向けた情報科学特別講義科目の再編を進める。
	達成指標	科目・講義内容・講師等の更新・入れ替え シラバスの相互チェックによる妥当性評価
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	IIST との英語開講科目の共有化を行い、情報科学研究科の学生が IIST 科目を受講できるようになった。教育内容の再編については、2020 年度に主要科目を隔年開講に変更することに向けて、講義の整理を実施した。
	改善策	2020 年度の主要講義の隔年化に向けて学生への周知を徹底する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成状況は A と判定する。理由は下記の通り。 (1) IIST との英語開講科目を共有化した。 (2) 主要講義の整理に基づき、隔年開講実施を明確にした。 (3) 特別講義科目の再編について進捗状況が明確でない。
	改善のための提言	主要講義および特別講義科目を見直し、一層の再編を進める。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
	年度目標	TOEIC 受験、あるいは、国際会議での発表を促進し、学生の英語力を定期検診する。
	達成指標	学生に TOEIC 受験を指導
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	全大学院生が、TOEIC を受験した。
	改善策	年 1 回は TOEIC 受験をするように継続的に指導する。
年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成状況は A と判定する。理由は下記の通り。 (1) 全大学院生の TOEIC 受験を達成した。 (2) TOEIC 試験結果に基づく指導が必要である。
	改善のための提言	学生の英語力を高める施策と連携させる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標	国際会議での発表を推奨し、修士・博士の学位審査時にデータベース化して評価に反映する。
	達成指標	国内・国際会議発表数のデータベース化
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	新たに学生の国内・国際会議発表のデータベースを構築し、受賞も含めて情報共有を図った。このデータベースは他学生の情報も見ることができ、学生相互の刺激にもなっている。
	改善策	学会発表データベースの管理を継続し、最新データへの更新を学生に促す。
年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成状況は S と判定する。理由は下記の通り。 (1) 学会発表データベースがしっかり構築できた。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

			(2) 対外発表へのインセンティブが大きく向上した。	
		改善のための提言	当該データベースの円滑・効率的な運用管理の仕組み作りに努める。	
No	評価基準		学生の受け入れ	
5	中期目標		一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、学生にとって受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。DDP・IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。	
	年度目標		一般入試・推薦入試についての課題を明確にし、制度改革を行う。	
	達成指標		一般入試の実施時期変更案、推薦入試の制度改革案の作成	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		S
		理由		2020年度入試から、一般入試の実施時期を2月に変更し、受験生の便宜を図った。同時に、受験科目を整理し、広い領域の学生が受験できるように改正した。
		改善策		2020年度入試に向け、新たな受験科目となるものについて予想問題を準備し、学生の不安にならないように努める。
		質保証委員会による点検・評価		
所見			達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1) 一般入試の実施時期変更および受験科目の整理を行った。 (2) 推薦入試制度の改革案について進捗状況が明確でない。	
改善のための提言		推薦入試制度の在り方について検討を進める。		
No	評価基準		教員・教員組織	
6	中期目標		学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。	
	年度目標		研究領域ごとの教員数について、バランスを再確認して、教員配置を行う。次期の国際化専念教員を採用する。	
	達成指標		研究領域ごとの教員数のバランス化を実施	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		A
		理由		新任教員の採用により、研究領域のバランスを改善した。次期の国際化専念教員については、9月採用に向けて活動している。
		改善策		次期の国際化専念教員の採用を確実に進める。
		質保証委員会による点検・評価		
所見			達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1) 4つの研究領域ごとの教員数のバランスが改善された。	
改善のための提言		研究領域そのものの見直しも必要である。		
No	評価基準		学生支援	
7	中期目標		学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。	
	年度目標		インターンシップへの参加促進や、OB/OG会の実施などを通して、キャリア支援体制を強化する。	
	達成指標		インターンシップ講義への受講指導 留学生日本語教育の受講指導	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		A
		理由		インターンシップ講義への参加を指導した。学部と連携して、小金井キャンパスの留学生向け日本語教育の充実について委員会が設置され、2020年度に向けて議論を開始した。
改善策			留学生日本語教育の充実について委員会での議論を継続する。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1)インターンシップ講義への参加が実施できた。 (2)留学生日本語教育の充実化へ向けての議論が始まった。	
	改善のための提言	インターンシップ講義への参加の効果を評価し、講義内容の充実化に努める。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
8	中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示を進める。	
	年度目標	科研費の応募を積極的に進める。共同研究の実施状況を調査する。	
	達成指標	教授会などを通じて、科研費等の応募を推奨	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	教授会を通して科研費等の応募を推奨した。2020年度の理工系の法政科学技術フォーラムに向けて企画を進めた。	
	改善策	2020年度の法政科学技術フォーラムの企画を進め、今後の社会貢献活動について再検討する。	
	年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1)科研費等への応募を促進した。 (2)法政科学技術フォーラムの企画を進めた。	
	改善のための提言	科研費等への応募率、共同研究の件数、などによる定量的な評価を進める。	
【重点目標】			
【教育課程・教育内容に関すること】			
理工学研究科と共に、IISTに働きかけを行い、IIST主催の英語開講科目の履修を可能にし、国際化に向けた教育課程を強化する。			
【年度目標達成状況総括】			
【教育課程・教育内容に関すること】			
理工学研究科と共に、IISTに働きかけを行い、IIST主催の英語開講科目の履修を実現した。また、主要科目の隔年開講化を議論し、2020年度に実施することを決定した。これにより少人数講義がなくなり、より活発な講義開催が可能になると同時に、教員の負荷を減らして、講義の準備などにより時間をかけ、質の高い講義が実現できるようになると考えている。2019年度より学生に周知を始め、学生に不利とならないように2020年度より実施する。			

IV 2019年度中期目標・年度目標

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	質保証サイクルの実質化し、かつ、記録に残すことで、教授会構成員全員の質保証の意識を高める活動を行う。
	年度目標	—
	達成指標	—
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的な教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。
	年度目標	2020年度に実施予定の専任教員の開講科目を基本的に隔年開講にする改正について、学生への周知の徹底を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	達成指標	隔年開講に関する学生への周知。先取り科目の履修促進。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
	年度目標	情報科学オープンセミナーにおける学生による国際会議発表準備のためのプレゼンテーションを推進する
	達成指標	情報科学オープンセミナーによる学生の英語プレゼンテーション回数
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標	国際会議での発表を推奨し、論文発表データベースに登録し、活用する。
	達成指標	国内・国際会議発表のデータベースの登録数
No	評価基準	学生の受け入れ
5	中期目標	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、学生にとって受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。DDP・IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。
	年度目標	一般入試の科目変更について、予想問題などを用意し、学生の不利益にならないよう配慮する。
	達成指標	一般入試科目の科目変更に対する予想問題の作成。
No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。
	年度目標	国際化専念教員を採用に際し、国際化の将来方針を明らかにし、適任者を採用する。
	達成指標	国際化専念教員の採用。
No	評価基準	学生支援
7	中期目標	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。
	年度目標	インターンシップへの参加促進や、OB/OG会や、ホームカミングデイを通じて、キャリア支援体制を強化する。
	達成指標	インターンシップ講義への受講指導 留学生日本語教育の受講指導
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示
	年度目標	科研費の応募を積極的に進める。共同研究の実施状況を調査する。
	達成指標	教授会などを通じて、科研費等の応募を推奨
【重点目標】		
教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】について、来年度から専任教員の科目を原則的に隔年開講に変更する。これに伴い、ガイダンスなどを通じて学生に対して履修上の注意を促す。また、学部4年生向けガイダンスにおいて、来年度に大学院に進学する学生に対して、教育に必要な科目について先取り履修を推奨する。		

V 大学評価報告書

2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価

情報科学研究科では、学習成果の検証、教育課程の内容や方法の改善・向上に向け、学生主体で研究成果のデータベースを構築し、研究活動が可視化できている。研究成果のデータベース化により学生の研究に対するモチベーションが上がり、結果的に学会表彰数の増加となって表れていることは極めて高く評価できる。理工学研究科と共同で英語による学位授与を行う IIST が軌道にのり、2019年度は複数名の学生が修士課程に入学予定であること、ダブルディグリーの卒業生

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

が博士後期課程に2名進学が予定されていることは、大学院教育のグローバル化推進の成果であり評価に値する。一方で、2019年度のダブルディグリープログラムについては、学生が1名だけとなっている。これについては、現在、学生獲得のための取り組みが進められているところであり、今後の状況を見守りたい。

1 教育課程・学習成果の評価

①教育課程・教育内容に関すること

情報科学研究科修士課程では、コースワークは専門知識獲得、リサーチワークは実践的研究能力向上と位置づけ、博士後期課程では、コースワークにプロジェクト科目を設置、リサーチワークに特別研究と特別演習を配置し、研究科全体でコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育が行われている。また、博士後期課程では、大学院学則にて授業科目を単位化し、修了要件とされており適切である。学部の3つのコースに、国際化対応の研究領域を加えた4つの研究領域により教育課程を編成しており、情報科学特別講義と情報科学オープンセミナーにより、専門分野の高度化に即応できる教育が提供されていることは評価できる。ダブルディグリープログラムを推進し、外国人特別入学制度による外国人留学生を積極的に受け入れた結果、IIST 修士課程に複数名の学生が入学し、またダブルディグリープログラム修了生2名および数名の外国人が博士後期課程に進学予定となったことは、グローバル化推進のための積極的な取り組みと明確な成果として高く評価できる。

②教育方法に関すること

情報科学研究科では、修士1年次の必修科目の情報科学オープンセミナーにおいて、専任教員と外部講師による最新技術動向の紹介により、研究領域が俯瞰され学生の履修誘導に寄与している。修士課程の学生は研究テーマに必要な技術習得のために履修科目を選定し、定期的に研究進捗を報告する。博士後期課程の学生は、自主的にもしくは指導教員の指導の下に研究テーマに関わる技術を調査研究し、定期的に研究進捗を報告し、指導教員が適切な助言や学習指導を行っており、評価できる。ガイダンス時に書面で研究指導計画を説明し、Web上で学習および研究活動の流れを公開しており、あらかじめ学生が研究指導計画を知ることのできる状態にある。修士課程およびダブルディグリープログラムでは、1回以上学外発表を行うよう指導され、発表会で学外発表状況が確認されている。研究科の全学生は、ポスターによる研究中間発表会を行い、全教員から研究の方向性についてコメントを得る機会がある。また、研究科長が指導教員に対して学位取得計画と進捗を毎年確認しており、研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導が適切に行われていると評価できる。

③学習成果・教育改善に関すること

情報科学研究科では、シラバスに提示した基準に基づき、適切に成績評価と単位認定が行われていると判断できる。修士論文審査では、指導教員が主査となり、主査と研究科長が指名した副査2名の計3名により論文を審査し、教授会で修了認定する。博士学位審査では、主査と3名以上の副査で構成される審査小委員会で学識を確認後、審査委員会で予備審査と本審査により学位認定しており、学位審査の責任体制が明確化され適切に学位授与されていると評価できる。また、ガイダンスで学位審査内規を学生に説明し、また小金井大学院要項およびWeb上で公開することで、学位論文の審査基準をあらかじめ学生に周知している。大学院在籍者数や学位授与率等を教授会で共有し、また中間発表会で学位授与の見込み数が把握できており、学位授与状況が正確に把握されている。ポスター形式で実施する中間発表会は、学生へのフィードバック効果も大きく、また修士論文発表会とあわせて教育成果を検証し、その結果を教育内容に反映させており、学習成果を把握・評価する取り組みとして評価できる。また、学会投稿数、発表数、表彰数をデータベース化し情報共有するとともに、これらを指標として各種奨学金の選抜に利用するなど、学習成果の活用が行われている。就職担当教員が就職・進学状況を取りまとめてWeb上で共有しており、研究科単位で就職・進学状況が把握されている。また、授業改善アンケートから授業内容の方向性を議論し、その結果を新規教員採用時および兼任講師への講義依頼時に反映させており、授業改善アンケート結果が組織的に利用されていると判断できる。

2 教員・教員組織の評価

情報科学オープンセミナーは、教員の研究テーマについて交流する場であり、顕在化した課題を主任会議、質保証委員会、および教授会でさらに議論を深掘りし、その議論で得られた結果をガイドラインや内規としてまとめ運用している。2018年度から教授会資料に内部質保証の項目を設け、活動記録として残すことにしており、研究科内のFD活動が適切に行われていることは高く評価できる。2018年度に在外研究員2名が海外で研究活動を行い、その成果を情報科学オープンセミナーでの共有することにより、研究科を活性化できている。教員の研究を加速する大学院生を増やすために、学外研究発表の奨励や学会参加費および旅費の補助を行い、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策が講じられていることも高く評価できる。

2018年度目標の達成状況に関する所見

情報科学研究科では、教授会報告に内部質保証の記録を残すという目標に対し、内部質保証の欄を作成し重要課題につ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

いて記載を継続している。また、英語開講科目の共有化、情報科学特別講義科目の再編という目標に対し、英語科目の共有化を行い、講義を整理した。TOEIC および国際会議により英語力を定期検診するという目標に対し、学生に TOEIC®の受験を指導した結果、全大学院生が TOEIC®を受験した。これらはいずれも目標を達成していると評価できる。

国際会議発表推奨と成果のデータベース化と評価に反映という目標に対し、国内・国際会議発表および表彰のデータベースを構築したことにより、学生の研究推進のモチベーションにつながっている。入試制度の課題を明確化し、改革するという目標に対し、一般入試の実施時期を2月に変更、受験科目を整理したことは評価できる。研究領域ごとにバランスを考慮して教員配置を行うという目標に対し、新任教員採用によりバランスを改善した。インターンシップやOB/OG会を通じたキャリア支援体制を強化するという目標に対し、インターンシップ講義参加を指導し、留学生向け日本語教育の充実に向けた議論を開始した。科研費の応募を積極的に進め、共同研究の実施状況を調査するという目標に対し、科研費等の応募を促進し、法政科学技術フォーラムの企画を進めたこと等について、いずれも目標を達成したと評価できる。

2019 年度中期・年度目標に関する所見

情報科学研究科では、情報系学会標準のカリキュラムを発展させながら先進的な教科・科目を組み込むという中期目標に対し、専任教員科目の隔年開講改正を学生に周知徹底するという年度目標を先進的な科目を組み込み学生に喚起させる試みとして掲げたことを評価し、その成果に期待したい。また、本改正以外に主要講義および特別講義科目の再編も必要と考える。複数教員が研究指導する教育・研究指導体制を目指すという中期目標に対し、情報科学オープンセミナーでの学生のプレゼンテーションを推進するという年度目標の設定は適切である。学外発表できる人材を育てるという中期目標に対し、国際会議発表を推奨、研究成果をデータベース化して活用するという年度目標も評価できる。一般入試と推薦入試を再検討し入学者の適性判断の厳格化を目指すという中期目標に対し、一般入試の科目変更について学生の不利益にならないよう配慮するという年度目標は適切である。4つの研究分野に教員を適切に配置するという中期目標に対し、国際化方針に基づき国際化専任教員を採用するという年度目標は評価できるが、4つの研究領域の妥当性検証と見直しも必要と考える。学位取得後のキャリア支援体制を充実するという中期目標に対し、インターンシップ参加推進、OB/OG会やホームカミングデイを通じてキャリア支援体制を強化するという年度目標は適切であるが、加えてインターンシップ講義参加の効果を評価し、講義内容の充実化も必要と考える。社会貢献を意識した研究成果の公開を進めるという中期目標に対し、科研費応募と共同研究実施状況を調査するという年度目標は適切であるが、科研費への応募率や共同研究の件数など定量的な指標による評価も必要と考える。

法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況

特になし

総評

情報科学研究科では、修士課程および博士後期課程ともにコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育が行われている。4つの研究領域により教育課程を編成し、専門分野の高度化に即応できる教育が提供されている。また、外国人特別入学制度による外国人留学生の積極的な受け入れ、理工学研究科と共同の IIST 修士学生の入学、ダブルディグリープログラム卒業生および数名の外国人が博士後期課程に進学予定などの成果からグローバル化推進のための積極的な取り組みが確認できており、評価できる。特に、情報科学オープンセミナーが研究領域の俯瞰、履修誘導、英語プレゼンテーション練習、また教員と学生の交流の場となり、研究活性化、研究指導、学習指導など重要な役割を果たしており、研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導が行われていることは評価できる。一方で、2019年度のダブルディグリープログラムの学生が1名だけとなっている。学生の獲得に向けた取り組みが進められているが、引き続きの努力を期待したい。修士論文審査および博士学位審査ともに、審査基準をあらかじめ学生が把握できる環境にあり、審査の責任体制が明確化され適切に学位授与されている。研究成果の指標となる論文の学会投稿数、発表数、表彰数をデータベース化し情報共有することにより学習成果が把握されるとともに、各種奨学金の選抜の指標として利用されており、学習成果が活用されていることは評価できる。顕在化した課題を教授会資料に内部質保証の項目を設け、活動記録として残すことに活用しており、研究科内のFD活動が適切に行われている。教員の研究を加速する大学院生を増やすために、学外研究発表の奨励や学会参加費および旅費の補助を行い、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策も高く評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。